

尊き命を永らえて

三三三回 奥田重元

私の人生は恰も、本籍ビルマ（ミャンマー）現住所サウジアラビア、寄留先インド、タイ、インドネシアの如きものと申すべく、諸兄等には嘸かし奇異に思われましようが、齢八十台半ばに近い現在も、これら縁深く郷愁の想い濃き国々との往來の度数は、今尚減ずる事なく続いております。今後も生涯現役で国際貢献を天与の使命と心得、十年二十年と言わず生ある限り初志を貫き通す所存であります。



大正十一年（1922年）の奥田重元少佐の肖像写真。この時、彼はビルマ独立義勇軍（BIA）の義勇兵としてタイに在り、18歳。

私は大正十二年の紀元節に、父台湾守備隊司令官奥田重栄の六男として、任地の官邸で花

火と爆竹の轟音に祝福されて出生、父は紀元節の元に父祖伝来の重を冠して重元と名づけた由であります。同級生諸兄より賜った渾名「タイワン」は出生地に由来し、よく言えば海外雄飛への夢を秘めた男、裏を返せば「茫洋とした生来の南方ぼけ」の意味であつたのかも知れません。

思えば遠い昔話になりますが、戦雲南溟の空に低迷し始めた昭和十六年、私は外務省情報部派遣学生として公用旅券を携えてタイ国に渡り、駐タイ大使の指示をうけ在バンコクの校主英国籍の学校に入学、タイ人の学生と寮生活を共にしながら、タイ語ビルマ語の習得と政治・経済・地誌の研究調査に当たりました。

対米英開戦の前日学寮を静かに離れた私は、大本営直属の対英領ビルマ工作「南機関」へ出向、ビルマ独立の英雄ととなえられたアウンサン將軍、危険を冒して英領植民地を脱出し日本で猛烈な軍事訓練を終えていた青年志士三十名を中核として、バンコクで急速編成中のビルマ独立義勇軍（現在のミャンマー国防軍の母体・略称BIA）の陸軍大尉に任ぜられ、下記の命令書を受領しました。

「奥田大尉は、兵団主力部隊編成のための兵器弾薬を宰領して、可及的速に国境を越えてビルマ領内に進出、ビルマ人壮丁を徴収教育して、戦力を増強しつつ所在の敵を撃破しランダー

ンに向けて速に前進、日本軍に先んじて此れを占領すべし」。

些か過大な命令とは感じつつも、即刻タイ北部の山岳地帯を踏破して国境を越えた我がB I A部隊は、日本軍からの通信隊配属を待てずに、通信器材欠如のまま突進した為、中部タイ国境メソート道を主作戦路とした日本軍との連絡途絶により、遙か南方の空から遠雷の如く轟き伝わる砲声の増大をもって日本軍のラングーン攻略戦酣と誤認し、日本軍に遅れてはならじと昼夜を分かつたため急進撃を敢行、マンダレー街道上ペグー北郊の敵主力陣地の背後に、夜半突如飛び込み攪乱する結果となり、未だ後方のシッターン河をはさんで対峙中の日英両軍司令部をして驚愕せしめるなど、思わぬ戦果を挙げつつ三月七日には他部隊に先駆けて、ラングーン郊外に進入する事が出来ました。

一九六八年三月ロンドンで刊行された前大統領モンモン博士著の英文ビルマ独立史に、「一九四二年三月七日、若き日本人将校オクダに率いられたラングーン突入尖兵隊四十名のB I A将兵がミンガラドン（ラングーン空港所在地）に出現した」と明記された事は、私の大きな名誉であり誇りとなりました。（日本軍のラングーン占領公式記録は昭和十七年三月八日）。生還など思いもよらぬ激戦場の生死関頭で、アウンサン将軍はじめビルマの青年志士達との間に育まれた戦友愛・同志愛は、兄弟愛にも勝る温かく濃密なものとなっておりました。

爾來、私の脳裏からは人為の「国境・国籍」の二文字が消え去りましたが、その事は今日まで多くの国々に、夫々心の許し合える真の友を得る事ができた私の人生にとって、誠に大きな影響を与えたものと考えております。

私はその後暫くバンコクへ戻り、大使館で戦塵を洗い落とし、ておりましたが、やがて日本の敗色の濃くなった昭和十八年夏、大使から「日本政府はインドの独立運動の巨頭チャンドラボース指揮下のインド国民軍（INA）との協同作戦により、国運の起死回生を賭してインドへの進攻を決定し、インパール作戦が開始される。

君はビルマでの体験を生かしINA将兵を伴い、英軍インド兵部隊陣地に匍匐接近して、祖国の独立の為INAに参加せよとメガホンで投降を呼び掛けるなど、甚だ危険な任務に服することを予め承知の上、対インド軍事政治工作機関の、ひかり機関に向う「と苦渋に満ちた面持ちで伝えられました。

私は祖国の閉塞状態の脱出に役立つならば生命の危険など問題では無い旨付言して快諾、老大使の憂慮に深謝して父への遺言状を託し、帰りの無い出陣準備を整え、ラングーンに飛び、陸路シンガポールから先着していたINA特務情報隊と合流して、鉄路ウントウまで北上して国境へ向かい、ジャングル内の前進基地に到着、昭和十九年三月十五日の作戦勃発に備えまし

た。奇しくも、私が所属したI N A特殊工作部隊は、京都編成の祭兵团六十連隊左突進隊の吉岡大隊と行動を共にする事となり、烈、祭、弓三ヶ団が布陣する長大な山岳地帯では至難と諦めていた兄重友（三中二十六回卒業）との再会が叶い、而も思いがけぬ事に兄の属した祭兵团歩兵第六十連隊インド語教育隊は我々の基地に三泊してインド語会話の実習を行った後、最前線の原因隊へ復帰して行きました。別離の夜、ターバン姿の私を心配そうに見つめながら「重元、絶対に死ぬなよ。元気で必ず京都へ帰ろうね」と繰り返し末弟の私に言い聞かせ、隊列の後尾から何度も振り返り暗闇の密林道に消えて行った兄の、悲しげな顔が今も眼に映ってなりません。

その兄も間もなくインパール周辺の敵陣に突入して果てました。重信、重直に続く兄三人目の戦死でした。敗戦の一年後に帰国した私は、B I Aの同士達により独立を達成したビルマ政府に手厚く迎えられる枢機に参画するなど、悔い無き人生に恵まれ、糟糠の妻と頼もしい嗣子に囲まれて、尊き命を承らえた幸せをししみじみと噛みしめ、亡き戦友や兄達の冥福を祈っております。

ビルマ・インド戦線

激戦下の京都三中同窓生

『文芸春秋』の反響

『文芸春秋』昭和五十八年十二月号に、「ビルマ独立義勇軍に敬礼」と題する十二ページの拙稿が掲載された。折しもビルマを訪問した韓国大統領全斗煥のビルマ独立の英雄アウンサン將軍の墓地参拝の機会を狙った北朝鮮特殊部隊による暗殺計画は、車列の到着の遅れにより失敗に終わったが、先着待機していた主要閣僚など随員二十名が爆死したラングーン事件の直後でもあり反響を呼び、多数のお手紙を頂戴した。

若い世代の人々の多くは、第二次大戦中ビルマが戦場となつたことを知ってはいても、ビルマに派遣せられた数十万の日本軍將兵が更に遙か国境を越えて、北は中国雲南省で敢闘し、西は三個師団六万の兵が瘴癘の密林山嶮を攀じて遠くインド・アッサム州の地にまでも進攻し、要衝インパールを指呼の間に望みながら数万の遺骸を山野に晒したまま敗退した『白骨街道』『地獄の戦場』と称せられた悲惨なる戦史を識る人は皆無であつた。

ビルマ戦線には、京都編成の第十五師団（祭兵団）と、第五十三師団（安兵団）の二個師団四万の将兵が派遣されていた。ビルマ方面軍麾下の総兵力は、英国領インドへの侵攻作戦が開戦直前の一九四四年三月初旬には、九個師団と一個独立混成旅団、及び多数の司令部直轄部隊を加え三十余万に増強され、連合国軍のビルマ奪還作戦に備えていた。

「攻撃は最良の防禦なり」との古来兵法が示す教訓にのっとり、祭兵団はインパール正面に突進、兵力・装備ともに数倍する強敵に対して善戦死闘の限りを尽くしたが戦勢逆転の頃より名だたるアッサムの豪雨沛然として国境の山岳路を押し崩し、山間の小径は泥濘の急流と化して補給路を断ち、飢餓と悪疫に苦しむ将兵は戦うに弾薬なく、ついには幽鬼のごとく痩せ衰えた無惨な姿となつて路傍に息絶える者数限りなき惨状となつた。

安兵団もまた北ビルマの苛酷なる戦場において、優勢なる連合軍を相手に勇戦奮闘を続けたが、戦局の頽勢は挽回すべくもなく、おびただしい犠牲者の屍を野山にさらしつづ敗退の一途をたどる状況であつた。

三中生も非業の最期

インド・ビルマの戦場で非業の最期を遂げた十数万の戦死者の中には、数多くの京三中の同窓生が含まれていた。

昭和三十九年七月調べの『京三中・山城同窓会名簿』を見ると、三中第二十六回（昭和十年）卒業生百七十三名中の物故者四十八名の氏名が列記されているが、その殆どは戦死者である。右の名簿に記載されている私の同期生第三十一回卒業生百八十九名中の物故者は四十二名であるが、大正年代後半生まれの同窓生は各期とも四十名から五十名近くの戦没者を出している。前記第二十六回生四十八名の物故者名簿の中には、インド・アッサム州カングラトビンで敵戦車に蹂躪せられて戦死した私の兄・重友の名も記録されている。

私は昭和十九年春の頃は、対インド謀略機関「ひかり機関」の一員として、髭面にターバン姿でインド国民軍の特務情報隊に配属せられ、日本軍の挺身隊と共に、インパールの最前線に行動していた。

密林中の奇遇を喜び合った兄・重友は、この作戦が終わったなら六年ぶりに日本に帰還除隊出来て、お母さんに会えるかも知れないと楽しみにしていたが、遂に帰らぬ人になってしまった。

兄ばかりでなく、三中の同窓生方とは、弾丸の飛び交う最前線や、密林の基地などで屢々お目にかかる機会があったが、一人として祖国で再会し得た人はいない。私から声を掛けるまでは、どなたも私をインド兵とばかり思い込んでおられたので、驚い

て見返された表情も忘れられないが、三中時代の思い出を先生方の渾名をまじえて語り合った一時が、今も懐かしく思い出される。

掃りのない行軍

稜線をたどる山道に、セメントで造られた二メートルくらいの高さのインド・ビルマ国境標識がたてられていた。作戦がはじまったばかりで、気力も体力も充実していた日本兵の中には、国境標識の横で逆立ちをしてインド・ビルマを持ち上げたなどと冗談を言い、笑い声に包まれながら進撃して行った一隊もあったが、やがて戦勢逆転して雨季を迎え惨憺たる退却路となった同じ道を、果たして何分の一の将兵が戻り得たであろうか。

第二次大戦中、京都編成の五個師団が海外に派遣せられ、戦闘に従事したという。先述の十五師団(祭兵団)、五十三師団(安兵団)と、フィリッピンで奮戦した十六師団(垣兵団)、中国へ派遣せられていた百十六師団(嵐兵団)、六十二師団(石兵団)であるが、石兵団はその後沖縄へ派遣せられて敢闘した。私の兄三名も、中国、フィリッピン沖、インドで戦死している。

戦後四十年。『平和ボケ』とも言われるまでに平和で豊かな国となった今、このような一文を書くことを批判し冷笑される方もあろう。

私自身、あの豪雨と泥濘の密林の路傍に憔悴の身を横たえて、

アメルバ赤痢に苦しみ、マラリヤの高熱にうかされながら、息も絶え絶えの中に思ったことは、「日本は敗けることは無いと思うけれど、もしこのまま敗けてしまったら、故国の親姉妹子々孫々は一体どうなってしまうであろうか」との心配であった。

私はようやく起きあがって歩き出す力が残っていたが、周囲には力尽きた戦友方の死屍累々と折り重なり、道ばたの屍臭は行けども行けども絶えることが無かった。万斛のうらみをのみながら、人知れず朽ち果てて行ったこれらの人々の身の上を想い、私は不憫でならない。

ビルマへの郷愁

—私の勲章—

さて時は流れて、太平洋戦争の末期、インド・アッサム州インパールへの進攻作戦の挫折により、ガングウを経てビルマ本土へ向け撤退する日本軍の後衛・市川大隊を印緬国境に近いレーダマ村後方の山岳地帯で見送ったのは、凄まじい雨期の明けた昭和二十年一月二十一日の夕暮れ時であった。

当時、連合軍のビルマ奪回に備えて再編成せられた光機関・南方軍遊撃隊司令部麾下の梅工作員として、二十五名のビルマ人隊員を率いて、英印軍の先鋒部隊に薄暮攻撃を仕掛けたのは

翌々日、一月二十三日の事であった。早朝から付近の村民を総動員して、峠の頂上からガンゴウ溪谷に向けて下る牛車道に、何百本もの倒木を並べて障害物を敷設した後、山間の盆地に幕舎を設営して大休止中の英印軍の背後から銃弾と擲弾筒を数分間浴びせ、敵の反撃を避けて、もと来た道を大急ぎで引き返した。私の最大の苦手は駆け足である。しかも急な上り坂の連続、それに自分が敷設した倒木を、エッコラサと乗り越え、乗り越えての難行苦行。前を走るビルマ兵二名は、私の腰に廻したロープを肩に掛けて引っ張って走り、後の二名は私のお尻を押しながら、



遺影の積みりで記念撮影

(19才)

へト、疲労困憊、もう一歩も進まない。喘ぎながら見上げた夜空には星が美しくまたたき始めていたが、ふと学生時代多摩川の土手を走りながら仰いだ星空が思

い出され誠に印象的であった。感傷に浸る間もなく我にかえつた私は、全員に停止を命じて崖を這い上がり、道路に沿って隊員を配置し、即戦即応の布陣を整えて反撃の覚悟を固めた。しばらくはじっと耳を澄ましていたが、敵は膚接して来ないらしく、何の物音もしない。

「敵を目の前に引きつけて、小官が手榴弾を投げたら、全員滅茶苦茶に坂下目掛けて撃ちまくれ。手榴弾は発火して、投げずに坂道を転がすべし」

と耳もとに声をひそめて囁くが如く全員に命令して、敵の接近に備えた。息を殺して待てども敵は来たらず、遂に夜明けとなり、一部、隊員を停止斥候として残し、主力はレーダマ村後方山中の陣地に引き上げた。

その後数時間毎に、停止斥候要員を交替させて、厳戒態勢を敷いて敵の進出を待ち伏せしていた処、二日目の午後、同地点の方向で突如静寂を破って激しい銃声と手榴弾の爆発音が山間に響き渡った。すわとばかりに、押っ取り刀で手兵十名を率い、予て準備していた頂上の抵抗戦に駆け付け、停止斥候を收容するためその帰来を待った。約三十分後、前方を警戒しつつ物静かに撤収して来た隊員は、全員無事。ほっとした。報告によれば、七名の隊員は、坂道に沿った崖上の樹林に間隔を置いて身を潜め、前方を監視していた処、白人将校に率いられた印度兵數十



B I Aラングーン入城親兵式
 ビルマ独立義勇軍（現ミャンマー国軍）
 1942年3月25日
 行進するB I A総司令部幕僚団
 （前列三人目ネウウィン大佐・後列三人目奥田大尉）
 日本映画社撮影、日本ニュースとして全国劇場放映。
 （NHKで保存使用）

名の一隊が
 自動小銃、
 軽機関銃を
 構えながら
 一歩一歩四
 囲を警戒し
 つつ、ゆっ
 くり、ゆっ
 くり登って
 来た由であ
 る。我が斥
 候長は、命

令通り手榴弾を発火させて坂道を転がした処、敵隊列のやや手
 前で炸裂し、一瞬叫喚を発して動転した先頭集団は大混乱に陥
 り、狂気の如く四方八方に撃ちまくる彼我の銃撃音は四囲の谷
 間峰峰に飴し、一帯は怒号と硝煙に包まれた。不意を打たれて、
 ひるんだ敵兵はやみくもな射撃を続けながら算を乱して一時数
 十メートル後ろの死角まで後退したが、直ぐ様、態勢を整えて
 甲高い指揮官の号令のもとに、猛射を繰り返して我が隊を制圧
 しつつもとの現地点に戻り、数名の負傷者を収容した後、あと
 すざりの隊形で坂下へと撤退して行ったとの事である。

我が隊は、数日後重装備の大部隊で進出して来た英印軍に膚接しながら後退を続けた。その間、密林を分けて宿營地に夜襲を仕掛けるなど遊撃戦を展開したが、平地に降りてからは、敵正規軍に対して手を出す術もなく、イラワジ河畔の町パコックに辿り着いた。

平地に降りて、最初の部落に近づいた時の事である。どうも村の様子が只事でないと直感した私は、平服の諜者を放って様子を探らせた処、チン人編成の英印軍特殊部隊Vフォースらしい兵隊百名前後が民家に宿營準備中との事であった。

既にレーダマ村を通過した英正規軍の大部隊は、私達の抵抗を警戒してか、前進の歩度を落としてはいるものの、怒濤の如き勢いで間もなく私達の背後に迫って来るように感じられた。道は一本道、退路を断たれた私達の一隊は、正にサンドウィッチになったようである。敵は、恐らく落下傘か、グライダーで降下して先回りしたものと考えられ、事態は寸刻の逡巡も許されぬ状況と判断し、直ちに左方山麓の密林に分け入り、迂回して脱出を計った。山裾とは言え、雑木入り乱れて密生し、半歩の前進をも阻むばかりの文字通りのジャングルであった。背を屈め、生い茂る小枝を払いのけながら、体をよじって斜面の樹林を潜り抜け、ターザンの映画もどきに藤蔓にぶらさがり、地隙を次々と飛び越えての難行軍三時間余、漸く日没前に部落の

反対側に迫り着き、脱出成功。『機を見て逃げるはゲリラの本領』であるが、このまま逃げては癪でもあり勿体ないので、『夜襲の御挨拶』をした後遁走する事とし、叢林に潜んで一時休息。腰に手挟んで来た「竹めし」を割いて夕食をとり、夜半を待った。やがて皎々たる月の光が中天高く冴えわたり、部落の森を墨絵のように浮かび上がらせる頃、部落手前の落花生畠に一列に散開したわが一隊は、息を殺して攻撃開始の時機を待っていた。突如、静寂を破って、

「バドウレ、バドウレ」（タレカ、タレカ！）

と絶叫する敵兵の誰何の声に続いて、「ダ、ダッダッ」とトミーガンの連射音が響き、ざわめき出した部落の敵は警戒態勢に入った模様である。

『村人を装って敵歩哨に近づき、ダー（山刀）で叩き斬り、本隊をひそかに部落内に誘導して敵陣を奇襲する手筈』の為に派遣した二名の企図は失敗したものと判断、「ヨシッ」とばかりに私は擲弾筒を発射、左右に伏せていた部下達は間髪を入れず、一斉射撃の火蓋を切った。敵は、待っていたとばかりに応射を開始したが、部落の幅一杯に布陣した敵の激しく打ち出して来る曳光弾は、光の糸を織りなすようで、黒色の杜をバックにして実に美しかった。私は擲弾筒が好きで、何時も弾丸二発と共に自ら携行し、また十数発の弾丸を部下に分配携帯せしめ

ていた。ダーン、グシャンと轟音を発して山間に響き渡る擲弾筒の炸裂音は、敵に与える損害よりも、部下のゲリラ隊員を喜ばせ、士気を鼓舞する事に大いに役立ったからである。

敵は数門の迫撃砲を所持しているらしく、「シュルシュル、シュルシュル、ドカン」と撃ちだしたが、着弾点は出鱈目で、我が方に損害を与えるには至らなかった。闇夜ではなかったが、寝入りばなを襲われた敵の闇雲に撃ちまくる銃弾は、恰も「闇夜に鉄砲」の諺通り頭上を遙かに高く飛び越えて、後方の森林に吸い込まれて行った。敵の応射は益々激しくなり、やがて私の撃つ擲弾筒の炸裂音が七発、八発目を数える頃、敵の射撃は正確さを増し、シュツ、チツ、と耳許をかすめ、ピチツ、ピチツと土煙をあげて、周囲に着弾し始めて来た。有力な敵に対して、これ以上深入りする事は危険と判断した私は、大声で、

「ピャン、ピャン」（退け！退け！）

と命令して、本道まで後ずさりして退り、周囲の部下を掌握しながら、予て準備していた後方の收容陣地に逃げ還った。撤退命令が徹底していなかった為に、敵前に置き去りになった最後のグループ十名を連れて、大分遅れて到着したモン・カンサンの報告によれば、

『敵の射撃が止んだので、隊長以下敵陣に突撃したものだと思いい部落に入った所、敵は一兵も残さず部落を放棄撤退していた』

との事であった。

パコックに退いた後、イラワジ河の茫漠たる中州を偵察中、朴訥そうな軍曹に率いられた日本軍の斥候に出会った。

「英軍も羊糞を食べるのでしょうか」

と変な質問をする軍曹に案内された叢林には、英軍のものらしい梱包多数が草や木の枝でカムフラージュされて集積されていた。軍曹が取り出したのはクラフト紙に包まれたダイナマイトであった。ゼリー状の肌触りと言い、色艶と言い、正しく羊糞そっくりで、嘗めると舌尖に甘味も感じられたが、木箱には英文でEXPLOSIVEの文字と、起爆方法の説明が印刷されていた。

相当の量を食べたという軍曹に、

「ダイナマイトが全量排泄されるまでは激動を慎み、特に野糞は小石などの上を避け、枯れ草のような軟らかいものの上にされると良いですな。さもないと、爆発する恐れがありますぞ」と冗談を言った処、本気にした軍曹は、顔を引きつらせて聞き入っていた。

「冗談、冗談。起爆装置を使わないとダイナマイトは爆発しませんよ」

と打ち消したが、しよげ返った実直そのものの軍曹は、部下を集めて「そろり、そろり」と去って行った。

ビルマ奪還を企図する連合軍の主力大梯団が間もなくこの辺

りに出現して、突如イラワジ河を渡り、ビルマの中央平原に殺到するなどとは考えも及ばなかったが、その頃、主進攻路に予定されていた此の中州一帯には、空挺部隊や第五列を降下させて、後方拠点の確保や兵器弾薬機材などの集積が秘密裡に行われていた模様である。

当時、英第十四軍司令官として、英印軍のビルマ反攻作戦を陣頭指揮した英国陸軍参謀総長スリム元帥（当時中将）は、戦後その著「敗北より勝利へ」（Defeat into Victory）の中に、

「敵後衛の小部隊が攻撃をしかけ、道路に障害物を敷設したが、工兵隊が出勤除去するため進撃が数日に遅れた」と数行にわたって記述している。

又、同元帥



2005年12月30日、インパール郊外の激戦地カングラントピ村の古戦場でクキ族日本国友好協会主催で行われた祭兵団60連隊（松村部隊）の最高の犠牲的戦闘を行った勇士、奥田重友氏（重元氏の実兄）に対するクキ族の象徴的追悼慰霊式典が行われた。

は、ガンゴウを経てパコックに向かった英印軍は、印度第七、第十師団編成による英第十四軍麾下の英第四軍団であつたと述べ、文中に、

『私は、第四軍団方面からする我が方に奇襲企図が日本軍に事前に察知されることを深く懸念した。第四軍団の各師団がイラワジ河畔に達してから、集結のために長い時間を費やしたり、あるいは渡河開始をためらったりすれば、日本軍にわが企図を察知される危険がさらに増大するであろう。私は第四軍団の最初の渡河は、軍団長が渡河開始の位置につくと同時に始める事を決定した。こうすれば、マンダレー西方に於ける第三十三軍団主力の渡河と殆ど同時か、または少し遅れるぐらいの関係で第四軍団が渡河することになり、その橋頭堡を構成すれば、なるべく早くメークテラに機甲部隊を突進させ、それに空挺部隊を注ぎ込んで日本軍を打倒するといった手筈になる』と書いている。

又、服部卓四郎元参謀本部作戦課長は、その著「大東亜戦争全史」第四巻に、メークテラの危急と題して、

『二月二十一日パコック南方においてイラワジ河を渡河せる不明の敵は、意外にも有力なる敵の機甲兵団にして我が配備の弱点を抜き、メークテラに突入し、飛行場は敵中に陥ち、兵站諸部隊や飛行場勤務部隊は蹂躪せられ、潰乱して為すところ

をしらない有様であった。敵は毎日延べ二百機の輸送機を以て続々兵力軍需品を増強しつつある。メークテラの喪失はビルマ方面軍の死命を制する。三月二十日にはマンダレーを失い、メークテラ会戦もまた断念の余儀なき状況に立ち至った。』と記述している。

スリム元帥の戦記の中に、前記の数行を発見した時の私の衝撃と感慨とは、到底筆紙には尽くし難いものがあつた。それは太平洋戦争の流れを変えたり、ビルマでの戦局を左右する様な大きな出来事でもなかったけれども、企図を秘匿して進撃して来た英印軍の主力兵团に対して、吹けば飛ぶようなノンプロの一隊が勇敢な戦いを挑む結果ともに全く符号しているので、事実の様に思えてならない。そして、それは人知れず胸の中に抱く私の勲章である。

【同窓の友に言い伝えられたきこと】

遙か天竺の彼方、人跡まれなるインドの山野にも、ビルマの密林溪谷にも、我が同窓生を含む征って還らぬ日本軍將兵十数万の遺骨が、淋しく眠っている悲惨なる物語を、そしてビルマ独立の志士アウンサン将軍と、三十人の同志たちと日本とは、かつてビルマ独立義勇軍（BIA）を通じて深い盟友関係にあったことなども、歴史の事実として忘れずに、語り伝えて頂きたいものである。

遙かなる故国の妻子を案じ、悲痛なる想いを残して息絶えていった将兵がたの憂いた通り、敗戦による遺族がたの惨苦は計り知れないものがあつた。戦後六十余年、灰燼の中から立ち上がった祖国は、経済大国と呼ばれるほどに豊かな國となり、どの國よりも活力に満ちた世代に受け継がれている。又、戦死者がたの尊い屍のねむるビルマ・インドの地は、戦後いち早く史上最大の植民地宗主国・大英帝国から独立の機会をつかみ、アジア・アフリカの被植民地は、自主独立のうねりに乗って次々と西欧諸国の侵略搾取から解放せられ、今や地球上から植民地の殆どが一掃せられた事実を、若し我が祈りのとどく術あらば、草むす戦友方にお伝えしたいものと、心から念じている。



「大東亞戦争陣没英霊之碑」の前で
(ラングーン日本人墓地)

